

ルーヴル美術館展 肖像芸術 — 人は人をどう表現してきたか

2018年9月22日(土) — 2019年1月14日(月・祝)



①



②



③



④



⑤



⑥

ただ一人の人物に似せていること—「肖似性」を本来的特徴とする肖像は、西洋において主要な芸術ジャンルの一つでした。当初は王侯貴族、高位聖職者だけが肖像を制作することができましたが、次第に一般の人びとの間にも広まってきました。

そもそも肖像は、はるか古より幅広く多くの人びとを魅了してやみませんでした。肖像の起源に位置づけられる作品の一つであり、3000年以上前の古代エジプトにおいて普及していたミラの顔を覆う棺用マスク(写真①)は、故人の容貌に似せたものではなく、様式化された顔立ちをしていました。1-3世紀頃になると、ミラの顔は板に描かれた肖像画で覆われるようになります(写真②)。この時代の肖像画は写実性・肖似性が重視され、故人の生前の顔立ちが生き生きと描写されたのです。二つの作品は、来世での生を死者に確約するという同じ願いに根差し、同じエジプトで制作されながら、「理想」・「様式」と、「写実」・「肖似」という対極的な表現をなすと同時に、あらゆる肖像作品に通底する問題を象徴的に示しています。

本展では、紀元前の古代メソポタミアの彫像や古代エジプトのマスクに始まり、19世紀ヨーロッパの絵画・彫刻まで、きわめて広範にわたる時代・地域の作品を対象としながら、肖像の担ってきた社会的役割や表現上の特徴を浮き彫りにすることが主要なテーマの一つですが、16世紀ヴェネツィア派の巨匠ヴェ

ロネーゼによる《女性の肖像》、通称《美しきナーニ》(写真③)は、27年ぶりに来日を果たす名画であり、見どころの一つとなっています。この肖像画に描かれた女性の眼差しは、鑑賞者の視線と交わるのではなく謎めいて見えることでしょう。

一方、王妃マリー=アントワネットの肖像画家を務めていたヴィジェ・ル・ブランの傑作の一つは、正面を見つめる伯爵夫人の優しげな雰囲気が感じられ(写真④)、15世紀後半イタリアのフィレンツェで活躍したポッティチェリとその工房が手がけた男性の肖像(写真⑤)では、顔をやや斜めに向けて涼しげな表情をのぞかせます。

一連の肖像作品は、自らの理想や外見の単なる再現を超えて、私たちの心の深淵に潜む、願望や愛慕ばかりでなく、悲哀、憂苦、恐怖などといったいくつもの感情を呼び覚ましなから、驚くほど多様で複雑な芸術性を呈しています。さらに肖像は—16世紀後半の奇才の画家アルチンボルドの作品「四季」連作に属する《春》(写真⑥)を例にとってみると、モデルの姿を描いた「肖像画」であると同時に、それを構成する花の一つ一つを識別した「静物画」という多義性をも帯びているのです。

このように身近でありながら、奥深い肖像芸術の魅力に迫るべく、本展ではルーヴル美術館が誇る豊かなコレクションおよそ110点の作品でたどりま。どうぞ心行くまでお楽しみください。

①《棺に由来するマスク》 新王国時代、第18王朝、アメンヘテプ3世の治世(前1391-前1353年)エジプト出土
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Franck Raux / distributed by AMF-DNPartcom

②《女性の肖像》 2世紀後半 エジプト、テーベ(?) 出土
Photo © Musée du Louvre, Dist. RMN-Grand Palais / Georges Poncet / distributed by AMF-DNPartcom

③《女性の肖像》、通称《美しきナーニ》部分 ヴェロネーゼ(本名/オロ・カリアーリ) 1560年頃
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

④《エカチェリーナ・ヴァシリエヴナ・スカヴロンスキー伯爵夫人の肖像》部分 エリザベート=ルイーズ・ヴィジェ・ル・ブラン 1796年
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

⑤《赤い緑なし帽をかぶった若い男性の肖像》部分 サンドロ・ポッティチェリと工房 1480-1490年頃
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Michel Urtado / distributed by AMF-DNPartcom

⑥《春》 ジュゼッペ・アルチンボルド 1573年
Photo © RMN-Grand Palais (musée du Louvre) / Jean-Gilles Berizzi / distributed by AMF-DNPartcom

フェルメール展

2019年2月16日(土) — 5月12日(日)

2019年2月、あなたは大阪にいますか?
2000年に当館で開催した特別展「フェルメールとその時代」は日本で最初のフェルメールを主題とした展覧会として、その後の日本におけるフェルメール・ブームの先駆けとなっただけでなく、美術館業界におけるちょっとした事件でもありました。当時の興奮をご記憶の方もいらっしゃるでしょう。あれから20年近くの歳月が過ぎた今も、フェルメールの美しく静謐な画面を求める人々の熱いまなざしは変わりません。

お待たせいたしました。フェルメールが大阪市立美術館に帰ってきます。



ヨハネス・フェルメール(1632-75)は17世紀オランダ黄金期を代表する偉大な画家のひとりです。本展は長らく世界のフェルメール研究を牽引し続けるワシントン・ナショナル・ギャラリー元学芸員アーサー・K. ウィーロック Jr. 氏を総合監修にお迎えし、現在35点が知られるフェルメールの作品の中から選りすぐりの作品をご紹介します。このうち《恋文》は大阪会場のみで展示されます。フェルメールが世界中で愛される秘密を会場でご確認ください。2000年のあの興奮を体験された方も、初めてフェルメールの世界に触れる方も、この機会をどうぞお見逃しなく。

《恋文》 ヨハネス・フェルメール 1669-70年頃
アムステルダム国立美術館